空の彼方に

光野ワタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の彼方に

【Ｎコード】
Ｎ６１６６Ｅ

【作者名】
光野ワタル

【あらすじ】
ちょっと変わった少年。彼の行方は、一体…。空だけが知っている、物語。

プロローグ（前書き）

はじめまして。
そうでない方もはじめまして。
光野ワタルといいます。

二作目となりましたが、よろしくお願いします。

プロローグ

「…はぁ、…はぁ、…はぁ…。」

暗闇の中を、少年が走る。

『見つけたぞ！　回りこめ！』

瞬く間に少年の周りには人垣ができる。

その中を、一陣の風が流れた。

大人たちの注意が一瞬、逸れる。

「何て、ね。」

「…本命。受け取って。」

少年が両手を左右に広げる。

斬。

誰もいなくなった場所には、大人たちが息絶えて転がっていた。

「梢くん。」
少年は、自分の苗字を呼ばれたということに気づくまで、暫くかかった。
そして、自分を呼んだ相手が、誰だと気づくまでに更に時間がたとうとしていた。
「…んん…ふぁ…。」
半分寝ぼけた声で、少年が生返事をする。

少年を目掛けて、一段と低い声が襲う。
「…冬・椰。」

声の主をようやく探り当てた冬椰は、うんざりしながら返事をする。
「何だよ。…折角寝てたのに。」
むすっとした少女が冬椰の視界に入る。
「冬椰、明日何の日か分かってるの？」
「…微妙にズレてるけど、名前の通りうるさいな。」
いつものことだけど、と、冬椰は諦めた顔をする。
「…あなた、分かってないでしょ。」

「分かってるよ。在校生代表だろ？」
眠そうな顔をごしごし擦ると、端正な幼顔が、朝陽に映える。
『雲雀ー！』
少女を呼ぶ声が聞こえてくる。

「あ、今行くよー。」
廊下を駆け出した雲雀に向かって、冬椰は、
「…廊下走るなよ…。」
囁くように、呟いた。

一年の自分に面倒な役を押し付けてきた、生徒会長・完璧超人如月涼のことを思うと、冬椰は少し気が重くなった。

「しかも『おまけ』二個もついてるし…」

ぶつぶつ言いながら、冬椰は廊下を歩いている。

天井がガラス窓になっている、古めかしい校舎の廊下を。

歩いている。
一人で。

冬椰を見守る空だけが、全てを知っていた…。

プロローグ（後書き）

お読みいただいてありがとうございました。
ご意見、ご感想お待ちしています。

第一話：暖かき蒼空（前書き）

謎の少年、梢冬椰。
冬椰を彩る、毎日が、ゆっくりと回りだす。

第一話：暖かき蒼空

「…あの完璧超人直々のご指名って、どういうことなんだろ。」

一月前、生徒会長の如月涼に呼び出されて、在校生代表を頼まれたときのことを、冬椰は思い出していた。

如月涼。

この田舎の公立中学校の中で、知らないものはいないない有名人。

地毛である蒼い髪。

紅と翠の瞳。

端正な顔立ちは、『大人系美少年』と呼ばれる顔立ち。

バレンタインのチョコレートは、県内外から集まる。

進路は、公立高校一の進学校、県立朝陽ヶ丘高校である。

冬椰は、うんざりするような思いで、思い返してみた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

こんこん。

「どうぞ。」

生徒会室の中から、穏やかな声が聞こえてくる。

「失礼します。」

「1年B組、梢冬椰です。」

「ま、固くなんなって。」

如月涼と思われる上級生の、左にいた男子生徒が、やや緊張気味の冬椰の背中を、ばんばん叩く。

冬椰はその荒々しさに、顔をしかめた。

「龍一。」

今度は、右側にいた、背の高い、大人びた顔立ちの男子生徒が、背中を叩いた男子生徒のを嗜める。

「一年生に『無茶』をしたり、『言ったり』しては駄目だ。」

背の高い男子生徒の視線が、一瞬如月涼と思われる人物を捉えたようだった。

「二人とも。」

穏やかさの中に、不必要なまでの威圧感を感じ、龍一という生徒と、背の高い男子生徒はもちろんのこと。

冬椰までも、背中に寒いものを感じた。

「一年生のほうが、礼儀正しいって、どういうことかな？」

微笑を絶やさない如月涼。

しかし、次の台詞に、冬椰は耳を疑った。

「後で、レポート用紙5枚に纏めておいてね。」

そして。

間髪を入れずに、冬椰の方に向き直り。

「わざわざごめんね。」

「3年A組、生徒会長の如月涼です。」

一切の反論を認めない微笑。

冬椰は、沈黙が得策と判断して、差し出された手をぎこちなく握り返した。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――

「…『おまけ二人』もついていたし…」
冬椰の背中をバンバン叩いた生徒は、「神無月龍一」と、顰め面をしていた背の高い生徒は、「水無月　樹」と名乗った。
「…全員有名人じゃん。」
何今更名乗る必要があるんだよ。
特に生徒会長。
冬椰は一人愚痴る。
如月涼の微笑の威圧に、ペースを完全に狂わされた冬椰。
何を言われたかは殆ど覚えていない。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――

「…や！　冬椰！」
ごんっ。
頭に鈍い衝撃を覚えて、冬椰は自分が寝ていたことに気づいた。
「廊下で寝るなんて、大した度胸ね？」

冬椰の眼前には、顔を真っ赤にした雲雀が立っている。

「…ふぁ…」

「…呆れた。」

ため息をついた雲雀は、冬椰に説教を始める。

「大体あんたは緊張感ってものがまったくないのよ。」

「注意していないとすぐどっか行くし、道端で寝るし…」

「如月先輩が探していたよ？」

ん…？

如月先輩…？

雲雀から聞こえてきた名詞に、冬椰の顔が青ざめる。

提出期限は今日だった。

「あ…やば…」

雲雀のことを忘れて、廊下を駆け出す冬椰。

「あ、こら、説教まだ終わってない！」

冬椰を追いかけて走り出す雲雀。

暖かい蒼空が、二人を見つめていた。

第一話：暖かき蒼空（後書き）

お読みいただいてありがとうございました。
いかがでしたでしょうか。

今後とも、光野ワタルと「空の彼方に」を、よろしくお願いします。

第二話：春雷（前書き）

在校生代表に選ばれた冬椰。
眠くなる卒業式の中で、嵐にまみれた時間を思い出す。

第二話：春雷

『在校生代表、1年B組、梢　冬椰くん。』

「はい。」

「暖かな春の空の下…」

冬椰が壇上に上り、如月涼と向かい合って、送辞を述べている。
今日という日まで、如月涼、水無月樹、神無月龍一にみっちり絞られた冬椰の送辞は、誰が見ても素晴らしいものだった。

送辞の草稿を涼に渡した冬椰が、壇上から降りてくる。

自分の席に戻ろうとした冬椰は、雲雀が悪戯っぽく笑ったのを認めた。

『続きまして、卒業生の答辞の言葉。』

『卒業生代表、3年A組、如月涼くん。』

涼の答辞を聞きながら。

『最近、妙に落ち着いているけど…。』

冬椰はそんなことを考えていた。

――

生徒会の後の部活動を終えて、夕闇の中を歩くと、如月涼と、雲雀の姿が冬椰の目に入った。
冬椰が近づこうとすると。
雲雀の元気すぎる声と、穏やかな声が聞こえてくる。

「はい！冬椰…じゃなかった。梢には私からも言い聞かせますので…」
「そんなに硬くならなくてもいいよ、浮雲さん。」
どうやら本人が来たようだし、と告げた如月涼の微笑みが、自分を捕らえたのを冬椰は感じた。

普通だったら逃げるのに。
如月涼の『あの微笑み』に見つめられると、カエルのように身が竦んでしまう。
『カエルの気持ちって、こんな風なのかな…。』
「こんばんわ、梢君。」
にっこりと微笑んだ如月涼の前から、冬椰は一刻も早く立ち去りたかった。

「…冬椰。」
怖い顔で、雲雀が冬椰を睨む。
「如月先輩との約束すっぽかして、どこいってたのよ、あんたは！！！」
「…どこだっていいじゃん。一々煩いよ…、僕の頭の中がどうにかなりそうな声で叫ばないでよ…。」
めんどくさそうに、冬椰が答える。
「良くない！！！」
雲雀が、一段と大きな声で冬椰に怒鳴る。

「まったく、あんたは、どうしてそんなにいい加減なわけ？」
「何であんたみたいなのが、在校生代表なのか…」
あたしにはわかんない、と言いかけて、如月涼の微笑みを認めて、びくっと体を震わせる。

「あ…すみません。先輩のこと悪く言ったわけじゃないんです…」
先程とは打って変わって。
しょんぼりした声で、雲雀が涼に謝る。
「気にしないでいいよ。」
相好を崩さずに微笑んでいる涼を見て、雲雀はやっと気持ちが落ち着いた。
「馬鹿みたい。」
ため息交じりで冬椰が呟くと。
「誰のせいでこんな思いしてるか分かってるの、冬椰？」
「誰って…。」
と、冬椰と雲雀は、涼が空を見上げているのに気づく。
「…如月先輩、どうかしましたか？」
慣れない敬語で、冬椰が告げると。
「雨だね。」

涼の突拍子もない言葉に、きょとんとする二人。
「…雨が降ってくるよ。後15分後くらいかな。」
「先輩…」
しおらしく、雲雀が涼に訊く。
「空、青々としてますけ…」
言いかけて、口を噤む。
見る見るうちに、空が黒い雲に隠されていく。

「近くのコンビニまで、走ろうか。」
言うが刹那。

涼は最近できたばかりのコンビニ目掛けて走り出した。
「あ、先輩！…冬椰、追っかけるよ！」
「…あの完璧超人に追いつけるわけが…」
「つべこべ言わない！」
雲雀は、冬椰の首根っこを捕まえて、ずりずり引きずりながら涼の後を追った。

――――――――――――――――――――――――――――――――
「やー、降ってきたな～。」
「…傘を俺は持ってないが。」
「通り雨だろうから、すぐ止むって。」
それより、早く飲もうぜと、龍一はコンビニの裏手にどっかと腰を下ろす。
はぁ、とため息をついて、樹も龍一に続く。
「涼、来ないな。」
樹が言うと。
「いんや。来るぜ。」
確信を持って龍一が断言する。
「何故、そういい切れる。」
「ヤマ勘。」
龍一がホットココアを飲みながら答える。
「そういういい加減な…」
言いかけて、樹は龍一の指差すほうを見る。
蒼い髪が、どんどん近づいてくるのが、樹にも分かった。
「んな？」
龍一がにかっ、と笑う。
「俺の勘は結構当たるんだぜぇ。」
樹は、苦虫をかみ殺した顔のまま、何も言えなかった。

「タオル、タオル。」
「ほい。」
龍一から差し出されたタオルで、涼は顔を拭う。
「頭も拭いていい？」
「それ貸すから、洗って返せよ。」
ありがとう、という声は、頭を拭く音に混じって、よく聞き取れなかった。
ようやく落ち着いて、涼は、今日は、僕一人じゃないよ、と言う。
訝しげに自分を見る樹に、涼は無言で雨の中を指差す。

ややあって。

雲雀と。
…彼女に首根っこを捕まえられた冬椰が、ずぶぬれになりながら、こちらへ向かってくるのが、二人にも分かった。
「…あのムッツリ一年坊主、夫婦漫才とは、やるじゃねぇか…」
龍一がぼそっと呟いたとき。

ごちん。

涼と樹の鉄拳が、龍一の頭を直撃した。
――――――――――――――――――――――――
―――――
「…寒。」

「はい。お茶。」
ぐいっと押し付けられたお茶を、冬椰はぶつぶつ言いながら受け取る。
「何か言った？」
「…別に何も。」
この男女、何とかならないものかな…。
濡れた学生服の下を気にしない雲雀を見ながら、冬椰は愚痴々々と熱いお茶を飲み干した。
「浮雲…だったか。」
樹が尋ねる。
「は、はい。」
雲雀の顔が緊張している。
この界隈では、涼、樹、龍一の三人は有名人である。
「…こーして見ると、中々かわ…」
ばき。
「ごめんね、浮雲さん。」
春の病気みたいなものだから気にしないで、と微笑んだ涼が告げる。
心なしか、冬椰の顔が不機嫌そうに見えたのだが。
目の前にいる有名人たちのオーラに、雲雀はただただ圧倒されていた。
そのとき。
ゴロゴロゴロ…
ゴロゴロゴロ…
空に雷鳴が鳴り響く。

暗黒の空から、紫の光が地上に落ちる。

もっと地上へ落ちるように。

そんな願いをこめて、雨が勢いよく降り荒ぶ。

五人の行く先々に、立ちふさがる嵐が、くすくす、と笑っていた。

第二話：春雷（後書き）

お読みいただいてありがとうございました。

冬椰くんのお話、いかがでしたでしょうか。

ご意見、ご感想などお待ちしています。

これからも、光野ワタルと『空の彼方に』をよろしくお願いします。

第三話：夜の帳（前書き）

不思議でクールな少年、冬椰。
彼の秘密とは…？

第三話：夜の帳

結局。
濡れ鼠になりながら、冬椰は家に滑り込んだ。
脱いだ靴に古新聞を突っ込むと、冬椰は急いで二階の自室に上がる。

1年前の出来事から、自分は変わった。
冬椰はそう思う。
それからの出来事に呑まれそうになって、慌てて頭を振る。
黒コートの陰険な顔を思い出しただけで、気分が悪くなる。

『冬椰、ご飯よ！』

階下から母親が自分を呼ぶ。
「分かったよ、すぐ行く！」
学生服を脱ぎ、ジャージに着替えた冬椰は、2つ上の姉に夕食を告げるべく、自室を後にした。

「ちょっと、冬椰、ゆっくり食べなよ。」
「うっさいよ、美夏姉、あ、男だから美夏兄か。」
「馬鹿冬椰、何か言った？」
「…脅迫しながら言うのは反則。」
「言ったこの口が悪い。」

「…だから男が寄ってこないんじゃな…」

ばき。

「…グーで殴るなよ…。」

「禁句を口にしたアンタが悪い。」

「二人とも早くご飯食べなさい！」

いつの間にか、二人の後ろに母親が立つ。

「…うちの女って、みんな男だよな…。」

恨み節が、冬椰の口から自然と零れた。

「…世は全て、言の葉もなし、か…。」

冬椰は自室に戻ると、ベッドに勢いよくダイブした。
冬椰の意識は、混迷の渦を通り抜け、やがて一つのポイントに辿り着く。

一年前。

冬椰は十死に一生を得た。

解体中のビルが『突然』崩壊し、偶然下にいた冬椰も巻き込まれた。

次々と悲報が知らされる中。

冬椰は、生きていた。
ただ一人の、生存者として。
意識が無くなる中。

冬椰は確かに聞いた。

『目覚めなさい。』

『目覚めるのです。新たなる調律者（ローラー）よ。』

『混迷の世を導くために、世界の予定を執行するために。』

『アルバインの御子よ、目覚めなさい…。』

そこから先はは覚えていない。

だが、美夏が見た冬椰は異様だった。
繭を思わせる糸玉に包まれて。
やっとのことで救出された冬椰の全身は、色とりどりの糸が貫いていた。
瑪瑙だとか、琥珀だとか。
そんな色の糸まであった。

しかし、見えたのは、美夏だけ。
他の人間にはそれがわからない様だった。

「やば…。」
突然がばっと起き上がった冬椰は、まだ風呂に入っていないことに気づく。
慌てて浴室に向かい、勢いよくドアを開けた時。

がこん。

冬椰の顔面に洗面器が直撃する。

「痛…。」
こんなことをする人間は、我が家に一人しかいない。
「痛いんだったらさっさとドア閉めてよね。」
一糸纏わぬ美夏が、かなりの勢いで。
「姉貴、ごめ！」
言うが早いか、冬椰は慌てて逃げ出す。
「あ…ちょっと！」
逃げられた、と思いながら。
また美夏はゆっくりと風呂に浸かった。

「…あれ？」
自室に戻った冬椰は、窓際に置いてある小さな水晶球の色が変わっていることに気づく。
半年前、謎の黒コートの男から渡されたその水晶球には、『依頼人』からのメッセージが届くようになっていた。
「あいつと関わるようになってからあんましいい事ないような…。」
溜息をつきながら、冬椰は色を確認する。
「赤だから…危険なこと、だよね？」
面倒なことにならなければいいのだが。

第三話：夜の帳（後書き）

お読みいただいてありがとうございました。
いかがでしたでしょうか。
今後とも、光野ワタルと、『空の彼方に』をよろしくお願いします。

第四話：お願い（前書き）

冬椰は濡れながら自宅に帰ってきた。
彼を待っていたのは…？

第四話：お願い

冬椰が水晶球に腕を差し伸べると。
鈍い光が、冬椰の腕を包む。

やがて、冬椰の脳裏に画像が浮かぶ。

泣いている女の子。

年齢は5，6歳位だろうか。
クマのぬいぐるみを抱えて。
ちょっと眺めの髪を、紐で結わえて。

冬椰には、何が危険なのかはわからなかった。
女の子の一言を聞くまでは。

『助けてほしいの』

たった一言。

映像が冬椰の脳裏から消える。
「これ…一体何？」
承認するもしないもない。
冬椰は、「引き受けます」と念じながら、再び水晶球に手を差し伸べた。

やがて、水晶球から聞きたくない声が響く。
『冬椰くん、この問題を引き受けてくれてありがとう。』
「何スか…正直気味悪いんですが。」

言葉にしない。
ただ念じるだけ。
それだけで会話が成立してしまう。
そんな関係も、もう半年になる。
相手はそんなことなど微塵も気にかけていない様子で、言葉を続け

る。
『私も、さるお方も、それぞれ忙しいので、君に白羽の矢を立てさせてもらった。』
『いい結果をもたらしてくれることを期待している。』
それだけを残して、男の声は響いてこなくなった。

「ったく、瑞樹さんもいい加減な…」
冬椰は面倒な顔で、瞳を閉じて、意識を集中し始めた。

冬椰の髪の色が、黒から銀に変わる。
閉ざされた瞳の色は、黒から紫に。

こんな変化が現れてきたのも、瑞樹と出会ってからだ。

冬椰の脳裏に、先ほどの少女の顔が浮かぶ。

『助けてほしいの…』

『助けて、パパとママを、助けて…』

それ以上のことは何もわからない。
冬椰は更に意識を集中する。

冬椰の脳裏に、廃墟のような建物が浮かぶ。
その建物には見覚えがありすぎる。

冬椰が十死に一生を得た、ビルの残骸だった。

第四話：お願い（後書き）

前回から非常に間が空いて申し訳ないです。

お読みいただいてありがとうございました。

いかがでしたでしょうか。

これからも、光野ワタルと『空の彼方』をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6166e/

空の彼方に

2011年1月19日04時01分発行